NPO法人加治川ネット21情報紙

かじかNET21

水辺のひろば

No.8

2008年 12月 1日発行

暮らしを語る階段が残されている川辺

川のある風景 ～太田川～

人は恵みのあるところで生きる。里山、河川、海など、自然がもたらす恵みを得るために、それらの傍らに住み着いた。今は利便性のある都市そのものが恵みの象徴といえるだろう。

流通や交通、飲食、教育、情報など利便性の高さが人を惹きつける。情報が実社会を動かす時代になるとなおのこと、インフラの整備も進む。

この風景の川は、新発田市飯島の界隈を流れる太田川。屋敷の裏手に川が流れ、川と人の暮らしを階段で結んでいる。

水に流すということわざがあるが、この川はどれだけの暮らしの抜け殻を流し続けたのであろう。野菜を洗い、洗濯をし、不要なものを始末しと、ひとえに静脈のごとく暮らしの血管として暮らしを支えてきた。川は語らず、とうとうと流れる。

階段だけが残され、草に覆われたこの川沿いを道行くときに、私たちはなぜか懐かしさを感じる。黙して語らぬ川の風景は、旅先で出会う農夫のようだ。だが、都市の川には懐かしさはない。

くらしの方言 その2

ごはん時の「かきくけこ」

食事の時は、**カ**行の言葉をよく使います。たとえば、こんなふうに。

じぃさ　「この**き**らず　まだぁ**か**ぁえるが？」
ばぁさ　「**き**ぃんな　**こ**ぉできたばっかだもの
　　まだ**け**ぇるさ。**く**ぅがね？」
じぃさ　「せば　**く**ぅわ。」
ばぁさ　「はよ　**か**ぁねど　いだむすけ
　　みな**く**ぅで**く**たえす。」
じぃさ　「みなは、**け**ぇっとねな　うなも**けっ**。」
ばぁさ　「せば、のごったの**く**んねがねぇ
　　みな**く**ぅですもうすけ。」

訳
かぁえる、くぅ、けぇる、けぇ＝　みな「食べる」の意。
きらず＝ おから。包丁で切らなくてよいから。
こぉでくる　＝買ってくる。

つまりこんな会話になります。

「このオカラはまだ食べられるかね？」
「昨日、買ったばかりだからまだ食べられますよ。食べますか？」
「それなら、食べる。」
「早く食べないと悪くなるので、全部食べてください。」
「全部は食べたくはない。お前も食べろ。」
「それならば残ったのをくださいな。みんな食べてしまいますから。」

宝物みーつけた

新発田カトリック教会

新発田カトリック教会は丸太と煉瓦によるユニークな建物として知られており、街の中心、中央町1丁目にあります。世界的建築家のアントニン・レーモンド氏の設計により昭和41年に完成し、既に40年以上を経過している建築物です。

そのユニークさの一端を紹介すると、まず、煉瓦の壁。煉瓦は旧荒川町の赤土を使い、同町の煉瓦屋が一千度以上の高温で焼いたもの。約3万6千個を使用しています。

レーモンド氏は自然な材料を好んだと言われています。使用してある木材の丸太は、村上市の杉材。そして特徴的なのが教会の窓。すべて和紙によるステンドグラスです。これはレーモンド夫人、ノミエ・レーモンドさんによってデザインされたもので、和紙の使用で一段と暖かみのある空間を作り出し、窓から差し込む光がステンドグラスの模様を映し出し、美しい光景を演出しています。

平成16年、「日本建築家協会25年賞」でその大賞に輝いた建築物です。皆さんも一度足を運んで見てはいかがでしょうか。

こんな場所発見

だれも知らない新発田川

加治川の小戸第一頭首工から取水した新発田川は、米倉手前で分岐し、江口、内竹方面へと流れ、五十公野の食品加工場や印刷工場際方向へと流れていきます。

そして、果樹園のある山王付近を過ぎると田畑を潤した用水が再び新発田川に戻り、水量を得て、豊町の大堰橋の酒造工場前で諏訪神社方面や石泉荘を経て清水園方面へと分かれていきます。

写真は、大堰橋の上流で山王の果樹園をしばらく下った辺りです。養護老人ホーム「あやめ」が近くに見えます。

水辺をゆっくり散歩できます。

穏やかな流れと共に、玉石による護岸整備がなされている川辺には、寄り付き階段や幅1.5mくらいの歩道スペースもあって、一応は親水河川のような造りになっています。

ただ沿道から少し離れているため、人影は無く、誰ともすれ違うことはありませんでしたが、犬との散歩コースには良いかもしれません。

大堰付近の竣工記念碑に「平成13年11月 県営大規堰水防除事業」等々とあり。

《編集後記》

「ワンリットル フォー テンリットル」プログラムを知っていますか。ユネスコが提唱する水プロジェクトを支援し、飲料水メーカーのヴォルビック社が期間を区切って実施したプログラムです。

アフリカのマリ共和国では、安全な水が飲めるのは、国民の三分の一、そのためいろいろな病気が、国民、特に子どもたちの命を脅かしています。そこで、ヴォルビック社の水を1リットル購入すると、売上金の一部が寄付され、10リットルの安全な飲料水に替えられマリ共和国などへ贈られるしくみ。昨年は7億2千リットル以上も贈られたそうです。

清潔な水がいつでも飲める日本に住めることに感謝し、「私も協力を」と思ったのですが、今年度の実施期間は終了、おまけに、ヴォルビック社のミネラルウォーターの回収騒ぎ。何を信じ、何に協力すればいいのやら。

応援してください
NPO法人
加治川ネット21　会員募集

年会費：個人 2,000円／法人 10,000円
事務所所在地：新発田市小戸886-1
電話：(0254)31-4111　**FAX：**(0254)31-4088
Mail：kjn21@ml.shibata.ne.jp
ホームページアドレス：
http://www.inet-shibata.or.jp/~kjn21/
会費振込先：
郵便局　00500-5-35812

レポート

収穫どっさり知識もどっさり「きのこ観察会」

「食べて、学べて、楽しい」と銘打った加治川ネット主催「秋の味覚・きのこ観察会」が、10月11日に開催され、約50人が参加しました。場所は市内板山、講師はきのこのプロ、新潟県森林研究所専門研究員の松本則行氏。きのこ狩りと勉強会、きのこ汁と新米おにぎり付きの自然と食に溢れる企画です。

それぞれが雨具で身を包み、午前8時に板山公会堂を出発。9時に目的地の山に到着し、三々五々きのこ狩りを行いました。10時過ぎから徐々に雨足が激しくなり、先に戻る人、採り続ける人それぞれでしたが、11時頃には留守番部隊と昼食の待つ板山公会堂に全員が到着しました。

並べられたきのこを参考に話を聞く

採ったきのこを銘々が新聞紙の上に広げ、松本先生が判別。その後に先生が予め用意された数多くのきのこを実際に見ながら、食べられるもの、食べられないもの、それぞれの特徴などを学びました。

いよいよ待ちに待った昼食メニューは、先生がこの日のために採取した天然きのこがたっぷりのきのこ汁、二王子山麓の特別栽培米の新米おにぎり、数種類の手作り漬け物。そのおいしさに参加者も大満足。食後は松本先生によるスライドを使った学習タイム。ほとんどのきのこは煮ても煮くずれしないこと、カニの甲羅と同じキトサンという成分でできているものもあるということ、きのこの種類や生態などを学ぶことができました。

それにしても、毎年何人かきのこで命を落とす人がいるのに、それでもきのこを食べたいというのは、それだけの魅力があるということなのでしょう。高コレステロールの人はきのこを毎日食べると数値が下がるのでお勧めだそうです。

7校が学習成果を発表 小学生環境学習発表会を開催

昨年、当会の設立10周年を記念して開催した「小学生による環境学習発表会」。予算がない、でも1回だけで終わらせたくはないと悩みながらも経費を何とか捻出して開催できることになりました。

今年は11月8日からイオン新発田店で22校が参加したパネルの展示、11月16日には、新発田市生涯学習センターで7小学校による発表会というスケジュール。

発表会当日は雨模様にも関わらず、約250人が会場に。片山新発田市長や渡邊聖籠町長などのあいさつの後、小学生の発表が始まりました。

在校生11人という赤谷小学校は5年生と6年生が一人ずつという厳しい条件の中、地域の人たちの協力を得ながら2人で取り組んだ有機米栽培を紹介。続いて米倉、御免町、荒橋、佐々木、米子、山倉の各小学校が、それぞれ川や生き物観察、そして自分の住む地域に目を向けた学習の成果を発表しました。

▲有機米と環境について発表した赤谷小学校

聖籠町から初参加した山倉小学校は、▼加治川で泳いだ楽しさを中心に発表

しばたの自然は今「猿害」

山でよく見かけるようになった猿。彼らはテリトリーを拡大し、平然とした顔で人家の近くまで現れ、苦労して育てた作物を奪っていきます。高齢化と産業構造の変化に伴い里山は荒れ、耕作放棄地が増えるに従い、野生動物の生息地は拡大する一方です。

人間が山野を手入れし、領域を確保することで防衛線ができた時代には、猿が山から下りてくることは無かったのですが、時代の変化ですっかり変わってしまいました。

山沿いの集落はどこも猿害で困っています。彼らはゲリラのごとく神出鬼没で畑を荒らします。猿害対策協議会を設けたり、捕まえた猿に発信機をつけたり、有害鳥獣駆除という形で猟友会に委託したりと手を打っていますが、現場の声を聞く限り、お手上げ状態のようです。

あるハンターは言います。「山野の手入れをして、人間の生存領域をしっかりと野生動物に示すことが大切。実際、そうしている場所には、猿は姿を見せない」と。

この当たり前なことが、少子高齢化の今日では、無理になっています。人間の生存領域が減ることはあっても増えることのないのが現実だとしたら、この先どうなるのでしょうか。

団体紹介 Vol.8

生き物とのふれあい イバラトミヨ水芭蕉の会

海岸線から直線で2キロ。2万株ともいわれる胎内市地本のミズバショウ群落。冷たく豊富な湧水に依存しているミズバショウやイバラトミヨなど、多くの動植物の維持できる環境を残そうと、平成4年春に発足しました。

現在、群生地北側約1.4haの水田を圃場整備から外してもらい、市の自然公園として整備中です。そこにはイバラトミヨはもちろん、メダカ、ドジョウなど、たくさんの生き物が生息し、子どもたちが安心して直接触れ合える場所となっています。近くに来た時には、のぞいてみてください。

【お問い合わせ】
同会　佐藤（鉄砲園内:TEL 0254-46-2662）

環境豆知識 仮想水

日本は多くの農産物を穀物や加工食品として輸入しています。それらを栽培するには、当然現地で水が使用されています。つまり間接的に多くの水を輸入していることに繋がるのです。

本来自国で栽培しようとした場合に必要とすべき水が、輸出国で使用されたことにより、その分の水が節約されたことになります。このような水資源のことを「仮想水」と呼びます。

食パン1斤あたり約500ℓ、肉100gあたり約2000ℓの水が使用されるといわれています。

年間の食品輸入等から算出すると、日本はおよそ640億m^3の水を輸入していることになり、国内の総使用水量900億m^3の7割に相当します。

日本は水が豊かだと思われますが、相当の水の輸入国ともいえ、21世紀は食物輸入、つまり「水」の争奪戦の時代になるとも言われています。

参考出典：独立行政法人水資源機構HPより

松浦小学校児童が総合学習で地元の川で生き物調査

平成20年10月1日の水曜日、松浦小学校4年生の総合学習の支援として、新発田市内六日町の天辻川で水棲生物の観察会を実施しました。

晴天の中、14名の児童が参加し、観察会の開始です。事前に採取した生き物の説明を受けた後、児童たちは一斉に捕獲活動へ。天辻川の本流は水勢があり深かったので、分岐している脇の用水に網を入れてみました。

成果としては、ウグイ、アブラハヤ、ヤリタナゴ、タイリクバラタナゴ、シマドジョウ、ドジョウ、スナヤツメ、ツチガエルなど。イバラトミヨは残念ながら捕獲できませんでしたが、シマドジョウは沢山捕獲できました。

用水の透明度は70センチ程あり、PHやCOD値も調べ、水質も良好であることが確認できました。

全国湧水フォーラムで当会の活動を紹介

秋篠宮殿下をお迎えして開催される「全国湧水フォーラム」が、今年は11月6日に五泉市で開かれ、当会や敬和学園大学など6団体が活動発表をしました。

当会は若月理事長が「農村の水環境の保全と地域づくり」をテーマに、絶滅危惧種イバラトミヨの発見、生息地保全に向けた活動、生息地に影響を及ぼす道路計画などについて発表しました。

フォーラム会場では40近くの団体のパネル発表もあり、秋篠宮殿下はその説明の一つ一つに熱心に耳を傾けられていました。当会は、ため池につくられたエコトーン（生き物の待避場所）の説明をしました。

エコトーンのパネル展示

寄稿 会津街道てくてく旅②

先号では、八木山まで到達したことをお伝えしました。今回はその続きから。

八木山では本陣であった渡部邸を見学。渡部氏から、昔の様子や家の間取り、骨董品などの宝物についてユーモアを交えた説明をお聞きし、89歳という年齢にもかかわらず、その元気な姿にただただ感心。

この日の宿泊地は野沢。野沢は立派な蔵や大きな家が建ち並び、この地域の文化の高さを感じました。宿泊場所は脇本陣旅館だった十一塩屋旅館。大山祇神社の祭礼中にもかかわらず、宿泊客は我々9人のみ。高速道路が開通してから、バス利用が主流となり、電車利用の参拝客が激減してしまったとか。時代の流れを感じさせられました。お風呂やトイレは旧式で戸惑いましたが、家庭的な旅館の佇まいや心のこもった料理には大感激。翌日の会津坂下町役場前までの約20キロの行程を考えながら、ひとまず就寝。

翌日は、軽沢、束松峠、天屋、本名、鐘撞堂峠をとおり会津坂下町役場前までの約20キロコース。午前8時、いざ出発！